

自己チェック ③⑧

もやもや病とはー

日本語のオノマトペが 病名になった珍しい病氣



三井記念病院脳神経外科
なかぐち ひろし
部長 中口 博

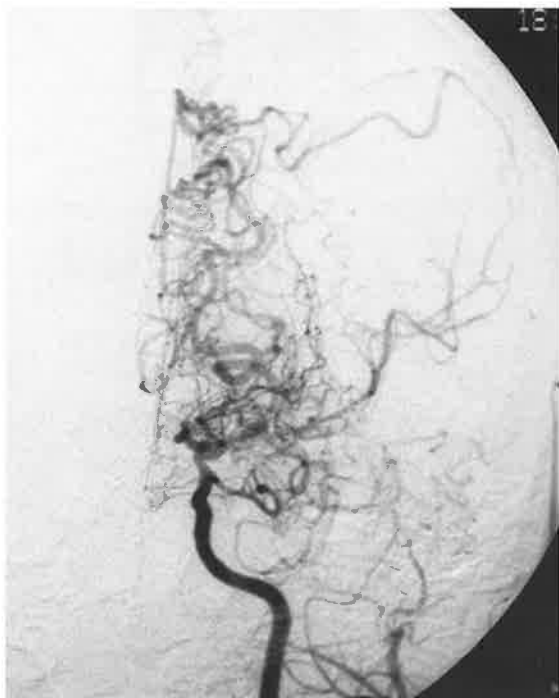
日本語が病名となった病氣の一つにもやもや病があります。脳梗塞、脳出血、けいれんをおこすまねな脳の血管の病氣で五歳ごろと四十歳ごろに多くみられます。

日本は昔から、アメリカやヨーロッパとはちがう文化が育まれ、英語では日本文化を表現することができないことがあり、古くはすきやき、芸者、ふじやま、最近では、つなみ、おたくなど日本語が英

語になった例は枚挙にいとまがありません。ただし、医学においては西洋医学が明治から一方的に日本に入ってきたことなどより、日本語の医学用語が世界で使われることはまれです。日本人に多い病氣に日本人の名前がついた例はあります（橋本病や川崎病など）、日本語の名詞が病名となることは少なく、もやもや病（moyamoya disease）はそうしたためにない病名の一つです。

もやもや病とは、脳内の太い血管が何年もかけて少しずつ細くなり、そのあい

だに脳梗塞、脳内出血やけいれんなどをおこす病氣です。15%は親から子へ遺伝しますが残りはいまだ原因がわかっていません。細くなっていくあいだに脳のもとと細い動脈が必要に迫られて太くなり、血管撮影ではもやもやとけむっているように見えます。この病氣は日本人を含めたアジア人に多く、最初にこの病氣を英語で報告した日本の先生が、もやもや病と名付け（1969年）、その後この名前が世界中に広まりました。「もやもや」ではなく「もじゃもじゃ」や「もくもく」



もやもや病の脳血管撮影の写真はこのように動脈の先が細くなり、もやもやとした血管の集まりが見られるのが特徴です

のように見える場合もありますが、やはり一番しつくりするのは「もやもや」というオノマトペだと思えますので、今から考えてもいいネーミングでした。よくある動脈硬化による脳梗塞と比べてめつたになく、十万人に0.3〜0.5人のかたが一年で新しくこの病気になると言われています。

もやもや病は5歳ごろと30から40歳ごろになることが多く、子供は脳梗塞、大人は脳出血がおおい傾向があります。も

もやもや病の子は、幼稚園から小学校にかけてけいれんや手足が動かなくなるなどの症状が出て診断されることがあります。けいれんは呼吸を早くした時にみられる

ことが多く、脳神経外科の古い教科書では「息をふーふー吹きかけて熱いラーメンをさまして食べている時に、けいれんを起こすことがある」と書かれていることがありますが、当然、ラーメンを食べることがありますが、当然、ラーメンを食べることがありますが、息をふーふー吹きかけ呼吸が早くなるのが引き

はもともと脳の血管が細いのさらに早い呼吸で血管が細くなると、けいれんがおきるのです。

もやもや病の治療には薬や手術があります。薬はけいれんを抑える抗けいれん薬、脳梗塞にならないようにする抗血小板剤などがあります。手術は細くなった脳の血管に皮膚の下を走っている別の血管をつなげて直接脳の血流を増やします（バイパス術）。また筋肉や皮膚の血管を

金となります。血液内の酸素が多すぎると活性酸素という毒が発生するため、体はあまり酸素濃度が上がりすぎないよう血管を縮こませます。もやもや病の患者さん

いので血管が筋肉や皮膚から脳に入ることが分かっていきます（動脈硬化により脳の血管が細くなった場合はこの方法は効果はありません）。もやもや病は脳のMRI検査で簡単に診断することができますので、気になる方はMRIを是非受けてください。もやもや病と診断され、以前に麻痺などの症状がみられる方は、再発作の予防を積極的に考える必要があります。バイパス術が可能な脳神経外科のある病院を受診することをお勧めします。